

が倒れて、口金のところから、少しづつ、まだ温みのこもった乳が流れたすま、濡れた地面へ吸はれていった。

遠い市街の方で、汽笛が鳴った。

雨あがりのしめやかな初夏の朝が明けか、つた。

白っぽく濡れた土の上に、牛乳の空瓶が冷きって横たはつてゐた。

微かに白んで来た雨戸のすきの、仄かな明るみのなかに、首を縊つた彼女の細ながい身体が、揺れるやうに、梁から吊下がつてゐた。冷たくなつたまゝ、の彼女の露はな手足には、蚊が何匹もじつと動かないで吸ひついてゐた。

(大正12年・曲水8-4)

風の中の唄

——美しい思ひ出——

あーをば、しーげれる、さーくらーゐの——さーとの、わたりーの、ゆふまぐれ——うん、まだあつた。——創世記を逆に行つて、全地球壊滅といふ悪日に、私が観た事——といふ、美しい段なら類がない、夢の思ひ出が一つあるんだが……さうさ、これは、ちと、人に洩らすに惜しい筋がはいる……やっぱり、さーとの、わたり——の——古い唄——あれを、御存じでせう。

あれが、東京はいつ頃はやりましたか……兎に角、東京ではやってやがて五十里。私の国の田舎へも大分唄はれ——そして廃れ——でも、まだ、どうかした拍子には、ねんねんよりの合間には、ひよいと、

子守の口にのぼる——といった時分。村の学校へ、子供が二人編入して来ました。——秋で——姉弟でした。

籠に囚へた二羽の小鳥を覗くといふ気で、すぐに、ちいちくもうちくのかわつぱ達が、横眼に見い——『あれア、東京から来ただつちよう。』——なるほど、姉さんは、十一か二、色の白い、切れ眼のながい、襟あしめいと仄かに……総じて花車な……弟も、従つて、その弟で。——一、二級上の私も、あ、好きな子だな、とは正直思つても、土百姓の、病ン眼に交る野育ちは一言口きく術も知らない……遠くから、そつと眺めてゐるだけなんです……

同じ頃、また、母の指図で、学校が退けると、英語を習ひに、嫌やく、村から町へ、毎日通つてゐました。……路が遠いし、知れたら、餓鬼大将の涕たれに、すぐそれ生意気だと虐められる……怖し辛しで……袴の姿を匿れるやうに運ぶんですが——先方は、お濠端にあつた、耶穌教の古い女学校で——それも、放課後を、一里の路を通つてから、ぼつぼつ始まる稽古なので教室にゐるうちに、日が暮れかゝる。と、そんな事も始終なんで、ほんとに……嬉しくはあつたが……嫌やだった。

それに、女学校はとつくに退けたあとの、教室は、天井が高く、いやに広い——。やうやく、絶えかゝる煖炉の、ちよろく火を後ろに、これも、トタンの屏風にかくれ——で、お稽古が始まるんです——女の髪の毛の匂ひが、どこか冷やり残る机に、薄暗くかたまつて一緒に習ふのが、これがまた、顔もまだろくく、覚えなない町の子供で、それで総勢が五六人……人気のない広い